咬合医科学実習（玉置勝司）

Training of Occlusion Medicine （Katsushi Tamaki ）

キーワード

① 全身管理医歯学
② 顎咬合機能回復補綴医学
③ 咬合，顎関節，咀嚼筋，下顎運動，咬合再構成
④ 脳機能，自律神経機能
⑤ 心身医学的医療面接

授業概要

歯科補綴学における咬合の歯科学および医科学的意義に関する基礎的な実習を行う。歯科学的には咬合の基盤となる顎関節と咀嚼筋の協調の結果として現れる咀嚼運動、発語運動、歯ぎしりなどのダイナミックな下顎運動の計測の一連を実習し、顎口腔系における咬合高径、咬合平面、誘導角度などの具体的な咬合のリハビリテーション手法について修得する。また、医科学的には咬合と高次脳機能（脳NIRS）、自律神経機能（生体情報モニタ）に関する基本的な計測を行い、咬合条件が生体活動の根源となる活動に与える影響についても実習を通じて修得する。

授業科目の学修目標

咬合学は歯科医学の礎となる基礎学問である。歯科臨床の全ては咬合学の上に立脚している。本実習の項目である咬合学の基本である基本咬合、顎関節・咀嚼筋解剖、咬合再構成術式、下顎運動計測、脳機能計測、自律神経機能計測を通じて、咬合医科学に必要な知識・技能・態度を修得することを目標とする。

授業計画

① 顎関節，咀嚼筋解剖実習　8コマ
顎関節、咀嚼筋の解剖実習を行う。
② 下顎運動計測実習　8コマ
下顎頭の動きの実習（CADIAX compact)を行う。
③ 咬合再構成実習　16コマ
有歯顎，無歯顎のセファロ分析を行い，オクルージョン・ワックスアップを行う。
④ 脳機能計測実習　8コマ
光トポグラフィー（ETG-7100:日立メディコ社製））、ワイヤーレス小型NIRS（Hb13-2、astem社製）による計測実習を行う。
⑤ 自律神経機能計測実習　4コマ
自律神経活動(クロスウェル社製）を計測する。
⑥ 心身医学的医療面接実習　16コマ
患者の医療面接の基本的手技からM-W分類、包括的診断法（K式多軸診断）を行う。

実習担当教員　玉置勝司

教科書および参考書

1．咬合のサイエンスとアート Martin Gross
2．ブラキシズムの臨床　佐藤貞雄，玉置勝司，榊原功二
3．サイコ・デンティストリー　和気裕之
4．顎関節症　日本顎関節学会編
5．口腔顔面痛の診断と治療ガイドブック　日本口腔顔面痛学会編

履修に必要な予備知識や技能、および一般的な注意

実習の前には、入門の講義内容を確認をし、理論を熟知して実習に臨むこと。

大学院生が達成すべき行動目標

① 解剖実習を通じて咬合の支点となる関節構造、下顎運動の源となる咀嚼筋の基本構造を修得する。
② 下顎頭の動きの実習（CADIAX compact)を通じて、下顎頭の動き、下顎位の基本を修得する。
③ 有歯顎，無歯顎，セファロ分析，オクルージョン・ワックスアップを通じて咬合再構成の基本を修得する。
④ 光トポグラフィー（ETG-7100:日立メディコ社製））、ワイヤーレス小型NIRS（Hb13-2、astem社製）による計測実習を通じて、脳機能の基本を修得する。
⑤ 自律神経活動を治療名人(クロスウェル社製）を通じて、心拍変動から自律神経機能の基本を修得する。
⑥ 患者の医療面接、M-W分類を通じて、包括的診断法（K式多軸診断）の基本を修得する。

評価

試験	小テスト	レポート	成果発表	ポートフォリオ	口頭試問	実技	その他
0%	0%	30%	0%	0%	40%	30%	0%

評価の要点

Ⅰ.口頭試問は、授業計画の6項目について行った実習の知識の理解度を判定する。1回40%
Ⅱ.レポートは、授業計画の6項目について課題を提出する。5%×6回=30%
Ⅲ.実技は、授業計画の6項目についてプロダクト達成度を判定する。5%×6回=30%

理想的な達成レベルの目安

Ⅰ.Ⅱ.Ⅲ.の総合で理想的な達成レベルは80%以上とする。